

大山寺僧坊跡発掘調査成果！

一、寂静山地区とその道について

しろがね荘の裏手にある小高い丘陵は「寂静山」と呼ばれ、大山寺の開祖とされる金蓮上人が葬られたという伝説をもつ山です。この山から南側に延びる屋根上には、大山寺僧坊跡群が広がっており、この箇所を寂静山地区と呼んでいます。僧坊とは、僧侶やお寺を管理するために住んでいた人々の住居のことで、塔頭や坊院などとも言います。寂静山地区には、このような僧坊が40前後あります。

また、この地区には僧兵コースと呼ばれるハイキングコースがあり、天気の良い日には登山者やハイカーによく利用されています。この道の両脇には、石塁（石で作られた堤のこと）が並行してはしり、その向うには平らな地形が段々畑のように広がっています。これが僧坊跡とその道跡です。今回はこのことについてお話ししたいと思います。



僧兵コース



二、寂静山地区の構造について

では、この地区の構造についてみてみましょう。この地区は、南側と北側で僧坊群の配置が大きく異なります。南側の僧坊群は南北に延びる道を軸にして左右に規則正しく広がっており、北側の僧坊群は東西方向と南北方向に延びる道を中心に魚鱗状に広がります。今回調査した僧坊跡J-14は前者のグループに属します。このグループは計画性の高い配置をとることから、現代の新興住宅地のように、短期間に強い規格性をもって誕生したと考えられます。今回の発掘調査で出土した遺物から、僧坊跡J-14は15世紀前後に営まれたことが分かりました。このことから、この南側のグループも、その頃に成立したのではないかと考えられます。

三、道跡について

次に、この僧坊跡群の中央付近を南北にはしる道について考えてみたいと思います。

この道の南側は行き止まりで、その突き当りには行く手を塞ぐように僧坊跡J-2が築かれています。これが南側グループの信仰の中心となるお堂であった可能性があります。もし、そのような考えるならば、この道跡はそのお堂への参道になりま。参道は途中で鉤形に折れ曲がること特徴で、山城や城下町など防御上の理由から遠くを見渡せないように工夫している構造によく似ています。自然地形に合わせて折り曲げていることも考えられますが、山寺と山城は共通する要素もあるように思えます。

発掘調査でこの参道には、部分的に踏石として大きな扁平な石が、道の進行方向に直交して並べられていることが分かりました。この踏石の意味としては、土砂の流れ止めや階段の踏み石など、様々なことが考えられます。

次に、参道の両脇にある石塁についてお話しします。今回の調査課題の一つは、この石塁がどのような構造なのかを確認することでした。石塁を断ち割って断面の観察を行ったと

ころ、現在は乱雑に積まれたように見える石塁の基部にはしっかりと石組みがあり、石組みの内部にもしまった土が入られていることが分かりました。そこには板が設置されていたような跡が確認されたことから、この石塁のように見える遺構は、板塀の基礎であった可能性が出てきました。



踏石が設置された道跡

以上のことから、少なくとも室町時代（15世紀）には、部分的に敷石を伴う参道の両側には板塀が続き、その板塀の向うに僧坊が建ち並ぶ景観があったことになりました。現在からは想像もつかないほどの壮観な眺めだったことでしょう。

皆さんもぜひ、当時の景観などに思いを馳せながら、僧兵コースをハイキングされてはいかがでしょうか。か？きつとこれまでと違った大山寺が見えることと思います。

（社会教育課文化財調査班）